

令和7年度島根県立大学人間文化学部  
学校推薦型選抜 社会人・学士 帰国生 私費外国人留学生特別選抜  
保育教育学科 小論文問題

【問題】

次の文章は、衝動について筆者の考えを述べたものである。この文章を読んで以下の設問に答えよ。

[設問1]

次の文章をよく読み、内容を300字以内で要約せよ。

[設問2]

次の文章の内容を踏まえ、教育現場における子供の衝動の例を1つ挙げ、その望ましい対応方法について、例えばに続けて500字以内で論ぜよ。

他者の目的にやみくもに従うことの問題性

デューイの書籍『経験と教育』の第六章では、衝動がキーワードになっています。彼が衝動をキーワードにしたのは、機械的で硬直的な学校教育が学生たちの自発性を押し殺しているという直観があったからです。

実際、この章の冒頭にあるのは、何かを学ぼうとしている当人の関心や欲求を無視して、外側から課題や目的を与えて、とにかくそれに従わせるようなやり方への批判です。会社や学校で嫌々取り組まされている作業のことを思い浮かべれば、デューイの言っていることはすぐにわかるでしょう。当人を無視して外側の事情で目的を課されているという意味で、このやり方を「外在的アプローチ」と呼ぶことにします。

作家の村上春樹さんは、今でこそランニング好きで知られています。だったら身体を動かすのが元々好きだったかということ、小学校から大学まで体育の授業が嫌で仕方なかったそうです。このねじれも、外在的アプローチの強制性に原因があります。

体操着に着替えさせられて、グラウンドに連れて行かれて、やりたくもない運動をさせられるのが苦痛でたまらなかった。だからずっと長いあいだ自分は運動が不得意なんだと思っていました。でも社会に出て、自分の意思でスポーツを始めてみると、これがやたら面白いんです。「運動するのがこんなに楽しいものだったのか」と目から鱗がぼろぼろと落ちたような気持ちがしました。じゃあ、これまで学校でやらされてきたあの運動はいったい何だったんだろう？ そう思うと茫然としてしまいました。

英語や数学、習い事の水泳やピアノ、親が期待している将来の職業など、好きに代入して構いません。別に身体を動かすことでなくても、自分の事情を無視して何かをやらされているとき、つまり、誰かが設定した目的に無理やり従わされているとき、人は嫌な気持ちになるものです。

自分との接点を見出せず、関心もない目的を課され、そのための行動を強いられることに、人は苦痛を感じます。例えば、学習者の関心に合わせて楽しさや意味を伝える努力を惜しんで、とにかく情報を叩き

込むような権威主義的な教育方法は褒められたものではないでしょう。人の心を見捨てる外在的アプローチは息苦しくさせるだけです。

極端な外在的アプローチは、深い学びや達成をもたらさないどころか、苦行を課す行いです。デューイもそう考えていたようで、「かつてプラトンは他人の目的を実行している人を奴隷と定義した」と指摘しています。関心と活動を橋渡しせずに、機械的に他者にタスクを課すやり方は、まるで隷属だと示唆しているわけです。〈中略〉

### 衝動にやみくもに従うことの問題性

デューイは、当事者の感覚を押し殺して外側からごちなく目的を課し、それに従わせる外在的アプローチを批判しました。すでに指摘したように、このやり方は大半の社会組織(学校や会社など)で採用されています。効率的で、計算可能で、予測可能で、コントロールしやすいものを求める合理化された集団には、必ずこういう要素があります。

外在的アプローチは、当事者の願望や欲望を見捨けます。つまり、外在的アプローチによって人を動かそうとするシステムは、偏愛や衝動を抑圧した上に成立するものなのです。おそらく、そこに息苦しさを漠然と感じ取っているからこそ、「本当にやりたいことをしなさい」「自分の本当の欲望を見つけろ」と語る自己啓発本に真実味を感じる人が多いのだと思います。

外在的アプローチを批判し、衝動についてデューイは考えていました。だとすると彼は衝動を全面的に肯定したのでしょうか。そうとも言い切れないのが、彼の面白いところです。デューイは、衝動のままに行動するやみくもな生き方のことも批判しています。というのも、衝動を形にするためには、衝動のことだけを考えてはいけなからです。

#### 例えば

出典：谷川嘉浩『人生のルールを外れる衝動のみつけかた』筑摩書房、2024年（一部改変）